



TITLE:

各地のたより

AUTHOR(S):

CITATION:

各地のたより. 天界 1939, 19(219): 280-283

ISSUE DATE:

1939-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167833>

RIGHT:

各地の

大阪ブラネタリウムだより

た　よ　り

ブラネタリウム
北 京 通 信
倉 敷 通 信
瀬 戸 だ よ り

☒昨今當ブラネタリウムは「星の劇場」と懸聲勇しく、日々入場數に盛況を見せてゐる。——去る二月には「建國紀元元年の空」と題して地球の歳差運動の説明をなし、三月には「春の星座」を見せ、四月に「太陽の驚異」を解き五月には「北極から南極への天空旅行」をなして、通俗的運用にて一般人士を迎へ、學生生徒には、教材資料の參考的解説で、幸ひ好評を得て來た。

☒過日當館に人事異動があり、尙若干の熱心者が採用された。又當館に電氣の瀬川技師を迎へ、昨今はブラネタリウムの演出上に照明や音響効果の新設備を計畫中で、これには照明會社の山崎氏（協會々員）の應援もあり、何れ近日素晴らしい成果を持つて見える筈である。又一方、當館に適當な天體觀測を行ふこととなつて、出品された望遠鏡を屢々活用してゐる。去る日のコデク・ベルテ彗星や岡林新彗星なども、入報早々に觀測を試み、市街中央でも、星の魅力に接する悦びを得た。日常は屢々太陽黒點を觀察してゐる。

☒五月3日の天文協會主催による「月食の夕」は快晴に恵まれて大盛況で、招待された理科關係の教職員500名が來觀し、先づブラネタリウムは特別演出を行ひ、珍しく百濟教猷先生の「月食講演」に滿座は等しく傾聽し、この有意義な一夜を悦び、更に屋上に協會員の提供による厚意の望遠鏡列は敷かれ、やがて始つた月食に、協會員の熱誠な説明と共に一同は夜の更けるも忘れて、美事な月食現象に見惚れた。

又この夜、當館で月食の16ミリ映畫撮影を試み、撮影係や時計係など館員協力して約4時間に亘るこの珍しい天體現象を、初めてフィルム上に記録することが出來た。

☒去る五月8日の夕、ヒリピン學生訪日團の一行をブラネタリウムに迎へ、商大學生の文詩（英語）朗讀により、伴奏音樂の効果もあつて、最もロマンチックに演出し、久方ぶりに珍しく愉快な天空旅行を楽しんだ。（高城記）

北　京　通　信

山本一清博士に夜のお食事から来て頂き、星空の下に車座になつてお話を伺ひました。みんな大變興味をもち、金宗華^{キンウシホリ}などはもう天文學者にでもなつたやうに太陽や地球や月には終りがあるだらうかなど、いろいろのことを質問してゐました。この北京の城が空の星を見て作られてゐるといふことも面白いと思ひました。カシオペア、北斗七星、北極星等の星座を總括して紫微宮^{しゐきう}といふのださうです。紫禁城といふ名がうなづかれます。(北京生活學校 小倉弘子)

倉　敷　通　信

驛を出てゆつくりまあ10分位もメインストリートを歩むともう田圃に出る。(なあゝんだ……) ちよつとあつけにとられた形で横丁の少し廣い通りに曲るとちよつと賑やかな所に出る。これとてゆつくり歩いて5分位でもう端れた。後は無茶苦茶に歩く。つきあたる、横丁へ這入る。汚い處だ。顔をしかめて早く何處かへ抜け様とあせる。あせるが一向そんな賑かな綺麗な街にも出ない。無暗と汚い家が軒を並べてゐる。何處まで行つても同じだ。遂々出た所は又元の田圃だ。倉敷には綺麗な所がないのである。(なあんだ、けちな市ちやあなにか學術都市だんて……)

これが私の最初の印象である。自分が初めてこゝへ來たのは今年の二月11日であつた。水野先生にわざわざ連れて來て頂いた。なんでもひどく雪が降つた。水野先生にお會ひするのも初めて、倉敷も最初の訪問、それにこの地方でも珍しいと云はれる位降つた雪の日とてお互ひに深い印象が残つてゐる事だと思つてゐる。上に書いた印象は2度目に私がいよいよこゝへ着任した折の感じである。その印象は今でも消えない。益々實感を深めてゐる。驚いたものが2つある。農研と美術館である。農研は天文臺の前にあつて天文臺と親類の様なものである。小川さんといふ人が居る。知る人ぞ知る“留守臺長”と俗に云はれる人でこゝの天文臺の主^{ぬし}だと云はれてゐる。自分はこの人に一方ならずお世話を受けてゐる。山本先生から冗談ならず“向ふへ行つたら小川君から天體寫眞をならへ”と。なる程こゝの天文臺にある澤山の月の寫眞は皆この人が撮つたのださうである。

美術館!!これこそ筆舌に盡し難い。まあ百聞は一見に如かずです。佛蘭西が國の名譽にかけても買ひもどすと云つた“グレコ”の大作もありますから。

天文臺は今や民衆天文臺として着々とその功をおさめて居ます。ひとへに原名誉豪長、水野主事のお蔭におふ所多大であります。

七月に大々的に倉敷天文臺を見學さるゝ催があるとかですから、ちよつと誌上を借りて私の倉敷印象記を述べたまでです。(岡林滋樹)

瀬　戸　だ　よ　り

瀬戸村と云ふのは、福山市の西5軒、南へ14軒、途中から輕便鐵道に乗つて備後の鞆へ出られる。鞆で分り難ければ、瀬戸内海の國立公園、仙醉島を中心に鞆ノ浦一帯は、日本一の鯛の名所だ。詳しく言へば廣島縣沼隈郡瀬戸村字長和、去年の秋に此處へ來て、次々に應召で1人減り2人減り、最後の者が今年の二月に陸軍氣象部へ轉じ、現在では孤軍奮闘と言へば、如何にも勉強家らしいが、そうでもない。

天候は仲々よろしい。天文研究には理想的だらう。夜明け頃からかすみ出して、正午頃に暫く照つて、又曇り出す。夕方からカラリと晴れて、夜が明ければかすみ出す。恵まれた此の天候に、大した仕事もして居ないのだから、まあしれたものだ。此の邊は殆んど小松林の小山続きで、山櫻の1本も見ることが出來ず、一寸淋しい氣もするが、土の悪い爲だらう、つつじならいくらでもある。村の子供はおやつの代りに、赤いつつじの花瓣をむしやむしや食つてゐる。仲々うまいそうだが、我等の口には合はず、まだ馴れぬ。もう蛇も出はじめた。大多數は青大將と云ふ奴で、まむしも居る。村の衆はまむしを見つけたら、一升瓶へ追ひ込んで酒を注ぎ込み、まむし酒を造つてゐる。これは秋口からだか蛇だけは大嫌ひ、愛したいがまだ好きになりきれぬ。郵便局まで1里、ポストまで8丁、隣家へ5丁の此の途中で、大抵5、6匹にはお目にかゝるので、近頃は餘り驚かなくなつたが油斷も隙もならない。

山の上だが、冬暖く夏は涼しい。今年の大寒中でも、〇〇火鉢を手炙りにして、それで充分、紫外線は豊富だし、空氣は清澄、水も良く、村の衆は親切だし、ギラギラした六月の太陽のまばゆいこと、それで少しも暑くなく、室内の

平均気温が23°C, まことに住み良い所だ。

遊びに来るならこれからぼつぼつ秋がよい。早曉の観測をすませて、阿引の濱の河豚釣の味は、都人には分るまい。季節にも依るが何でも釣れる。小鯛、ちぬ鯛、キスゴ、こち、烏賊、さより、はぜ、でべら。まだある。かれい、いつだこ。だが何と云つても河豚釣が最も面白く、年中大抵釣れてゐる。何?、河豚を食つたら死ぬ?、冗談じやない。自分が斯うして手料理で、ピンピンしてゐるのだから大丈夫!! 河豚は煮附てもよく、味噌汁によく、チリ鍋なら更によく、小河豚の刺身も仲々捨難いものだ。所謂ふぐのあばれ食ひで、琵琶湖の鮓とは比較にならぬ。

労働もする、晝は終日暗室で、ビーカーと天秤と検温計と硝子板と取りくんで、2, 3度は木炭ガスの中毒で卒倒もした。そうして出来た〇〇が乾燥する迄に、飯たき、木割り、洗濯、山の下まで水汲み、兎の世話もせねばならぬ、仲々忙がしい。鶯も居るそうだが、こいつは聞えぬ。訛りは少しもないとの事。山兎も相當に居る。褐色の大きな奴が、夜中に観測所の構内迄襲撃して来て、お蔭で野菜は目茶目茶にされ、こいつが惱みの種である。一番の苦手は水汲みで、最初の頃は1回降りたらヘトヘトになり、何も出来ない。字も書けない、指先が震へる、息切れがする、心臓は弱い方らしい。昨今はもう大分馴れて、1時間半毎に4回降りて、毎日入浴もしてゐる。山住ひで毎日の入浴は少し贅澤な方だらう。(S. K 生)

*

*

*

(第279頁より)

氏は再度グリッグ・スケラップ彗星の搜索はアメリカに數日先んぜられたるも獨立に發見されたるものである。

下保彗星、岡林新星、五味彗星などは如何にも貴重なる撮影を残された事である。天文月報は斯る斷片をしばしば報告して居る。

榮譽ある發見、研究、努力を遂行せられたる氏は自らに其の榮を歸せず、青年の意氣と理想に精進されつゝある。